

千島列島における人類活動史の考古学的総合研究（Ⅲ）

—特に北方四島の先史文化研究を中心に—

右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ,V.M.

Key Words 続縄文文化期 (Zoku-Jomon culture period)、アイヌ文化期 (Ainu culture period)、史跡 (Historic site)、学術交流 (Academic exchange)、文化交流 (Cultural exchange)

1 はじめに

北海道からカムチャツカをつなぐ千島列島は、旧石器文化からはじまり、アイヌ文化に至るまでの人類活動史について空白の研究領域であり、基礎的なデータが欠落している地域である。しかも、北海道の先史文化あるいはアイヌ文化の研究にとって、東の千島ルートは北のサハリンルートと同様に北海道で異文化の交差・接触を明らかにできる要素をもっている。そこには、歴史的な画期や文化的な変容、過去の自然環境の変遷、自然資源の活用史など、千島列島における歴史・文化の解明につながる基礎的研究の推進が重要となってくる。

千島列島を含めた北方四島の研究は、「北方文化共同研究事業」の一環として、2005（平成17）年～2009（平成21）年にかけて本格的に取り組むこととした。右代・鈴木ほか（2008、2010）は、この研究で歴史・文化資源の活用の可能性を探ることを目的に国後島古釜布郷土博物館の収蔵資料を中心とする先史文化の遺跡群の時代性と文化遺産の活用について明らかにしてきた。さらに、そこで北海道や北方四島の先史文化資源をつうじた文化交流や歴史教育の推進、観光資源への活用など様々な展開が期待できることを指摘した。このことを実現するためには、遺跡や史跡などの埋蔵文化財の基礎的研究が必要であり、人類が遺した文化遺産を調査し、時代、種類、規模などを記録することや歴史認識をロシア側の研究者と共通のものにすることが求められる。そこには、北方四島の領土問題をこえる地域史や民族学的研究はもとより、日本史や世界史にまで展開できる重要な文化遺産が存在するからである。

この研究成果を踏まえ、2010（平成22）年～2013（平成25）年まで「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり」として研究プロジェクトを立上げ実施してきた。また、外部資金として科学研究費補助金（基

盤研究B）「千島列島における先史文化の考古学的基礎研究—特に北方四島を中心に—」（研究代表者：右代啓視）、科学研究費助成基金助成金（基盤研究C）「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」（研究代表者：鈴木琢也）などを使用し実施してきた。右代・鈴木ほか（2011、2012、2013、2014、2015）は、この研究プロジェクトを中心に北方四島における先史文化の基礎データの収集のため、国後島と色丹島での遺跡調査と、国後島古釜布郷土博物館を拠点とする北方四島の郷土史、民族学、民俗学、歴史学などの専門家との学術交流を進めた。この研究成果として、第一に、国後島、色丹島の現地調査により遺跡の分布やその特性などの基礎データを収集することができた。国後島では65カ所、色丹島では22カ所の遺跡を確認した。これは戦後はじめての大きな成果であり、両島の未調査地域を調査することで、さらに遺跡数が増えることを指摘してきた。また、千島アイヌに関する現地調査や国内調査を実施し、特に千島アイヌの特徴的な民族資料として、国内に現存する植物製民具であるテンキを集成し、基礎的なデータを報告した。第二に、学術的な交流をつうじ、文化遺産の重要性、歴史認識など両地域間の博物館交流を積極的に進めてきた。この内容は北方四島の専門家との共通課題として、北海道と北方四島の「歴史・文化・自然環境の活用」をテーマに、文化財保護、史跡・遺跡、博物館などの調査をつうじ、博物館の運営や経営、持続可能な管理体制、文化財保護の実態、先史文化を含む北海道史など多くの情報を提供し、将来に向けた両地域の歴史・文化活動について議論してきた。特に、アイヌ民族の歴史・文化については、北海道の各地域の博物館に収蔵されている民族資料や有形・無形文化財の保存・保護の状況、または伝承活動の状況などを共同で調査した。この学術交流をつうじ、歴史・文化の認識、文化財保護の思想、博物館の資料管理、展示手法、教育普及活動な

どの運営や経営など、共通する多くの視点が持てたことが最大の成果である。例えば、北方四島と知床半島の歴史・文化・自然などは、共通する環境にあることから人類が共有しなければならない文化遺産がこの地域、または千島列島全域に存在することの認識をもてた。さらに、2010（平成22）年から遺跡や史跡を活用した文化財保護と歴史学習として、国後島の小学生が遺跡の草刈りを行い、現地で先史文化の歴史学習などが実施されるようになった。このように、学術交流でえた成果が学校教育や社会教育の現場で積極的に運用されるようになった。

このように、北方四島では様々な制限があるなか研究成果を着実にあげてきた。さらに、研究を発展させるため、新たに「北方四島の考古学研究」とした総合研究プロジェクトを立上げ、2015（平成27）年から4カ年の計画で本研究を実施することとした。本研究は、北方四島を含めた千島列島の人類活動史を総合的に明らかにすることを大きな視座として、特に北方四島の先史文化を同島の研究者と共同研究することで共通の認識をもつことが第一の目的である。第二に、この研究プロジェクトをつうじ学術交流を進め、両地域の博物館交流や歴史認識をさらに深め、学術交流の友好関係を進展させることを目指すものである。

ここでは、2017年に実施した北方四島の第Ⅲ次学術調査と調査でえた資料の分析について、考察を加え報告するとともに、北方四島の専門家を招聘して実施した学術交流について報告する。

2 北方四島の遺跡調査

北方四島での考古学的調査は、2005（平成17）年～2014（平成26）年にかけて継続的に研究を進めてきた。これまでの北方四島の考古学的調査は、右代・鈴木ほか（2008、2010、2011、2012、2013、2014、2015）で、その成果を報告してきたところである。そのなかで千島アイヌのテンキの物質文化的な研究では、アリュシャン列島、さらには北米大陸との文化的な交流、民族的な接触で成立する可能性を指摘してきた。さらに、右代（2014a、2014b）は、千島列島に北方四島を含めた先史文化について、国後島と色丹島の先史文化をみると連綿と文化が築かれていたわけではなく、後期旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化と、その文化のなかでも限られた時期にしか遺跡が存在しないことを総括的に指摘した。また、北方四島には、カムチャツカ半島地域の物質文化の影響を受けた遺物がみられることを指摘するとともに、確実に中部千島までは縄文文化晩期、続縄文文化の遺跡が存在すること、さらにオホーツク文化は北千島まで拡がりをもつこと、アイヌ

文化はこの地域に特徴的にみられる内耳土器がカムチャツカ半島南部まで拡がりをもつこと、チャシ・コツは北千島まで拡がりをもつことを指摘してきた。さらに、鈴木（2011、2016）は、これまで実施してきた北方四島の学術データを基に古代・中世にかけての北方交易のルートを明らかにしてきた。

これらの研究成果を基に、新たに進める本研究の北方四島の現地調査は、これまでと同様に内閣府、外務省をはじめ、北方四島交流北海道推進委員会などとの協力、連携をはかり「ビザなし交流・専門家交流事業」の枠組みのなかで実施することとした。特に、北方四島の国後島、色丹島の未調査地域、未調査の択捉島、歯舞群島の調査を積極的に取組むこととし、4カ年の現地調査を実施することとした。

2015（平成27）年の第Ⅰ次学術調査の成果は、国後島中部太平洋側海岸域で、新たに縄文文化期、続縄文文化期、擦文文化期の6カ所の遺跡を明らかにした。さらに、北方四島には黒曜石の産地がないため、遺跡から採集した試料の産地推定の分析を行い黒曜石の流通ルートについて検討を行った。方法は、黒曜石の北海道産、カムチャツカ産のデータと北方四島の遺跡から採集した黒曜石データを比較分析し、このデータで流通ルートを検討した。この結果、国後島と色丹島の石器類は、北海道の白滝産、置戸産に限られた黒曜石を素材として利用していたことを明らかにした（右代・鈴木ほか 2016）。学術交流の調査では、北海道博物館をはじめ小樽、余市の博物館、史跡・文化財、歴史・文化などの調査を実施した。

2016（平成28）年の第Ⅱ次学術調査の成果は、択捉島中部オホーツク海側海岸域と国後島中部太平洋側海岸域で、新たに縄文文化の前期、中期末から後期初頭、続縄文文化、オホーツク文化の前期末から後期、擦文文化の晩期の17カ所の遺跡を明らかにした。択捉島の考古学的学術調査は、戦後初めてオホーツク海側の別飛と紗那、ナヨカの地域で実施したものである。さらに、学術交流の調査は、北海道南部地域においてテーマを「北海道南部の歴史・文化」と「災害復興と観光」として共同調査を実施した。この共同調査は、四島の専門家の要望であり、共通課題として設定したもので大きな成果を上げている（右代・鈴木ほか 2017）。

ここに報告する第Ⅲ次学術調査は、北海道博物館の2017（平成29）年の研究プロジェクトとして、択捉島の調査を実施したものである。この調査は、6月8日～6月11日にかけて、オホーツク海側の別飛と紗那、有萌の地域で実施した。6月8日、根室港琴平岸壁の出港は定刻どおり午前9時30分であったが、低気圧の影響で天候が悪化し根室沖で回復を待つこととなり、一日遅れの出発となった。このことから現地での調査は、6月10日

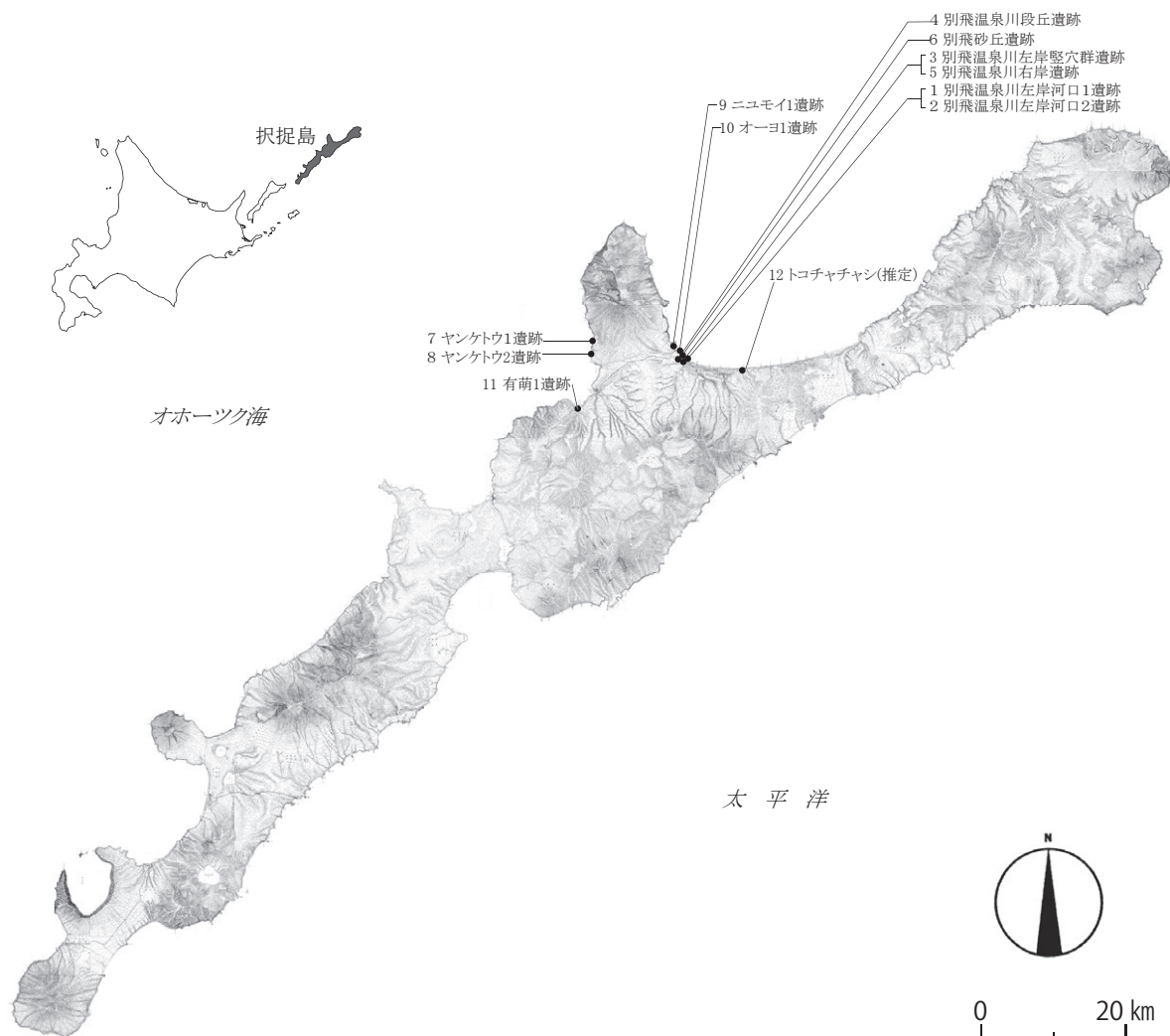


図1 択捉島の遺跡分布 (国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

一日だけの調査となった。

悪天候も重なったが当初の計画では、国後島の調査も計画していたが、調査経費が十分に確保できず断念した。また、択捉島の調査計画は、留別、ラウス、ルイビラの地域を候補地としていたが、ロシア人居住地以外の立入が厳しくなりクリル地区行政からの許可がおりなく昨年と同様の地域となった。

この調査で新たに発見した遺跡は、次のとおりである(図1、表)。

(1) 択捉島の遺跡調査

択捉島の概要については、右代・鈴木ほか(2017)で示したので、ここでは省略する。

有萌では2016年7～8月にかけ、「クリル諸島社会経済発展連邦特別プログラム」である新クリル発展計画のインフラ整備(道路整備)にともない行政発掘が実施されていた。サハリン州文化省からの委託を受けてサハリン

州大学の考古学担当者が発掘を実施していた。

島の遺跡は、主にロシア人が居住する別飛から紗那、有萌以外の地域に自然保護地区が設定されていることから遺跡全体の保存状態が良く、これまで発見されていない遺跡も多く存在している。

本調査は、択捉島紗那郷土博物館ヴィノグラドヴァ、V. M.学芸員、択捉島紗那図書館エフチュシェンコ、N. I.館長、国後島古釜布郷土博物館スコヴァティツィーナ、V. M.館長と共同で、択捉島中部オホーツク海側の別飛と紗那、有萌の地域で実施した(図1、表)。

① ニュモイ1遺跡

この遺跡は、択捉島中部のオホーツク海側の別飛北部、オーヨ湾の北に発達する標高10～11mの海岸段丘上に位置している(図1、図2、表、写真2-1)。遺跡の位置は、北緯45°17'09.88"、東経148°01'08.86"である。遺跡は現在の別飛住宅街の北側にあるオーヨ湾北側の海岸段丘上に位置しており、オーヨ湾は漁港として利用され、

表 択捉島の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡の時期											遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホーツク文化	擦文文化	アイヌ文化				
1	別飛温泉川左岸河口1遺跡							○	○			遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、石器類	2016年調査	
2	別飛温泉川左岸河口2遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	後北C2・D式土器、オホーツク式土器、トビニタイ土器、石器類	2016年調査	
3	別飛温泉川左岸竪穴群遺跡							○				遺物包蔵地 (円形、フライパン形24)		2016年調査	
4	別飛温泉川左岸段丘遺跡						○	○				遺物包蔵地 (円形、フライパン形7)	北筒式土器、下田ノ沢式土器、剥片（黒曜石）	2016年調査	
5	別飛温泉川右岸遺跡							○				竪穴住居址			
6	別飛砂丘遺跡										○	墓	2014年に砂丘の崩れで人骨と墓標を確認。現地で埋葬。	2016年調査	
7	ヤンケトウ1遺跡							○				竪穴住居址 (円形6)	縄文土器、石器類	2016年調査	
8	ヤンケトウ2遺跡				○							竪穴住居址 (円形7)	温根沼式土器、石器類	2016年調査	
9	ニユモイ1遺跡							○				竪穴住居址 (フライパン形4)	下田ノ沢式土器	2017年調査	
10	オーヨ1遺跡			○	○	○	○	○				竪穴住居址 (皿状円形3)		2017年調査	
11	有萌1遺跡			○	○							遺物包蔵地		2016年サハリン大学発掘、2017年調査	
12	トコチャチャシ										○	未踏査		2017年調査（推定）	

北側海岸部には択捉島に本社を置くギドロストロイ社の漁業加工工場と養殖場が建設されている。この工場の裏側の海岸段丘一帯が遺跡であり、一部は工場建設で破壊されており、段丘上の道路によって遺跡の一部が破壊されている。遺物は、道路に散乱した状態で確認できる(写真2-1)。ここから土器2点を採集し、段丘上ではフライパン状の平面形を持つ竪穴住居址の窪み4基を確認した。遺跡の性格は集落地である。時期は、採集遺物から縄文文化前半の時期と考えられる。

採集した土器は、図4-1・2に示したものである(写真1-1・2)。図4-1・2は深鉢の胴部片で、RLの細かい縄文が施されている。器厚は薄く成形され、焼成は良好である。これらの特徴などから、図4-1・2は縄文文化前半の下田ノ沢式土器と考えられる。

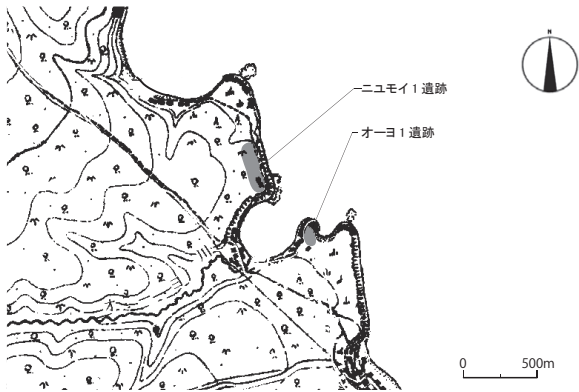


図2 択捉島別飛周辺の遺跡分布
(国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

②オーヨ1遺跡

この遺跡は、択捉島中部のオホーツク海側の別飛北部、オーヨ湾の西側に発達する標高8～10mの岬状になった海岸段丘上に位置している(図1、2、表、写真2-2)。遺跡の位置は、北緯45°16'47.00"、東経148°01'25.32"である。遺跡は現在の別飛住宅街の北側にあるオーヨ湾西側の海岸段丘上に位置している。遺物の散布は確認できなかったが、皿状の窪みを持つ竪穴住居址3基を確認した。遺跡の性格は集落地である。時期は、縄文文化～縄文文化の時期と考えられる。

③有萌1遺跡

この遺跡は、択捉島中部オホーツク海側の有萌湾の北西に発達する標高35～36mの海岸段丘に位置している(図1、3、表、写真3-1)。この遺跡では、石川(1891)により収集した石斧2点が報告されている。遺跡の位置は、北緯45°12'28.32"、東経147°50'53.8"である。

今回の調査では、発掘が実施された状況が確認でき、現地での情報を収集した。発掘調査は、2016年7～8月にインフラ整備に先駆けサハリン州大学が発掘調査を実施したとのことであった。現在、出土資料は全てサハリン州大学に運ばれ、資料を整理中とのことである。調査結果からは、7,000～8,000年前の文化層を確認したとのことであった。おそらく、縄文文化早期～前期の時期であろう。今後の報告を期待したい。

④トコチャチャシ(推定)

この遺跡は、現地で遺跡の位置を確認したが、時間的な都合で詳細な調査はできなかった。遺跡を推定した位

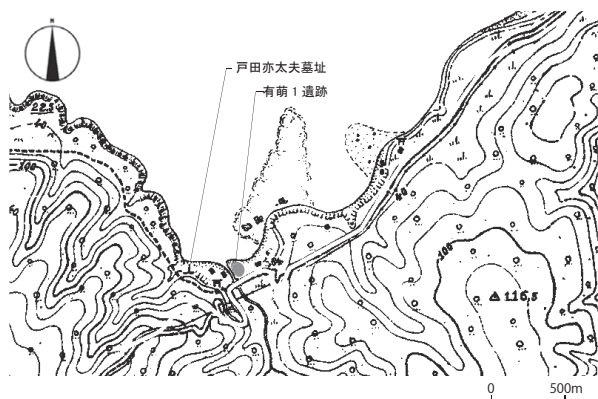


図3 択捉島有萌周辺の遺跡分布
(国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

置の概要は、次のとおりである。このチャシコツは、択捉島中部のオホーツク海側の別飛から約12kmの西側に発達する砂丘の内側、標高17～18mの海岸段丘上に位置している(図1、表、写真3-2)。遺跡の位置は、北緯45°15′25.90″、東経148°09′27.51″である。かつて、トコチャ漁場があった内陸側に位置することから推定した。鹿能(1976)は、このチャシを地名にのこされたチャシコツによって報告しているが、遺跡の詳細は不明である。今後の調査課題とした。

⑤戸田亦太夫墓(史跡)

この史跡は、紗那から南東約4kmの有萌に建てられた「戸田亦太夫藤原常保墓」とされる石碑があった地点である。国土地理院の数値地図50,000『紗那』にも記されている。この石碑は、文化4(1807)年4月にロシア帝国のニコライ・フヴォストフが率いる軍艦2隻が内保湾に入港し、ロシア兵が南部藩と津軽藩が守備していた内保番屋、紗那幕府会所を攻撃し、戦闘になったことに由来する。この戦闘の結果、紗那幕府会所はロシア兵が倉庫を破り米、酒、雑貨、武器、金屏風などを略奪した後に放火、日本側は敗戦となった。上役の幕臣であった戸田亦太夫は、敗戦の責任を痛感し、留別へ撤退中の野営の陣屋で自害したとされている。後に、石碑は戸田亦太夫の長男亦五郎により建立され、石碑が位置する沢を戸田沢と呼ぶようになったと言われている。

これは文化3(1806)年からはじまった「文化露寇」とされる日本の北方拠点にロシアに攻撃された事件であり、ロシアではフヴォストフ事件とされ、かつて北方四島ではこれに関連する史跡であった。この石碑について、択捉島紗那出身の岩崎忠明氏(1934年生まれ)から多くの情報をいただいた。岩崎氏が小学校のころ遠足で毎年、紗那からこの石碑まで訪れ草むしりなどを行い大切にしていた想いが強い場所であり、択捉島紗那出身の方は知らない人はいない所である。岩崎氏は択捉島訪問の際、この場所に何度も訪問を試みるが海岸部のみの経路

しかなく、干潮時でなければたどり着けないところである。岩崎氏の情報を基に石碑などの現状を把握するため、現地調査を試みたが満潮のため海岸部がふさがれ現地には到達できなかった(図3、写真3-3)。昭和10年ごろに撮影した写真には、木造の上屋がかかり現存していたことがうかがわれる(写真3-4)。現況や場所も確認ができたので、今後の調査課題とすることにした。

今回の択捉島の調査は、悪天候で1日短縮での調査であったが、島に向かう船内で元島民の方から多くの調査に有益な情報をえることができた。現地調査は1日だけであったが、新たに縄文文化ないし続縄文文化の時期の遺跡2カ所を発見することができた。今後の課題となったのは、アイヌ文化のトコチャチャシ(推定)の詳細調査、「戸田亦太夫藤原常保墓」が建てられた地点の調査である。当初計画した留別、ラウス、ルイビラの地域については、再度計画することとなった。この地域は、元島民留別出身の三上洋一氏(農学博士)から多くの遺跡の情報をえている。三上氏の父一郎氏は、択捉島留別村を中心とする遺跡から土器や石器などを収集しており自宅の納屋に収蔵していたと聞く。戦後の約3年間、択捉島に残されロシア人と混在生活を行った時、収集した土器、石器は、ソ連の文民警察官イワノフ氏、通訳のニコライ氏と接触し、収集品をイワノフ氏に託し強制退去したという。いずれ博物館をつくることを約束して別れたとのことである。また、三上氏の所には、昭和初年に考古学者も訪ね所蔵品の実見をしているほどの貴重な資料があった。この資料の行方も、今後の調査課題となっている。

この調査で択捉島紗那郷土博物館ヴィノグラドヴァ,V.M.学芸員、択捉島紗那図書館エフチュシェンコ,N.I.館長から学術交流の成果として報告をえた。前年に実施した第Ⅱ次調査で我々は、発見した遺跡を利用した文化財保護あるいは学校教育での歴史学習教材としての活用について議論を交わしていた。その後、ヴィノグラドヴァ,V.M.学芸員、エフチュシェンコ,N.I.図書館館長が早急に企画し、小学生(7～12歳)が中心となる「先史文化探検隊」26名が組織された。先史文化探検隊のプログラムは、夏季に遺跡を調べることから始め、竪穴住居址の草刈り、竪穴住居の再現、縄文文化あるいは続縄文文化の人々の生活などを考える機会とした(写真3-5・6)。かつて島にどのような人が住んでいて、生活が営まれていたかを子どもたちと共に学習している。この遺跡は、2016年に共同で調査した別飛温泉川左岸竪穴群遺跡、別飛温泉川左岸段丘遺跡を活用して実施したものである。冬季には、竪穴住居址の規模を遺跡で調べるなどの遺跡探検が行われた(写真3-7)。また、択捉島のレスキュー隊の協力をえて、火のおこしや昼食づ

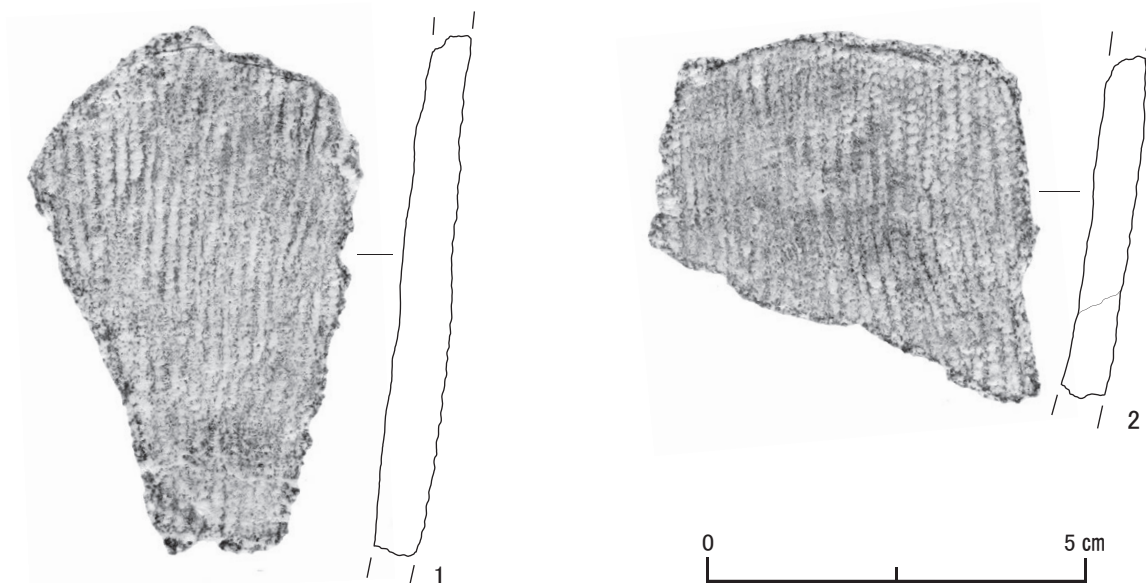


図4 択捉島ニユモイ1遺跡採集の遺物 (S=1/1)

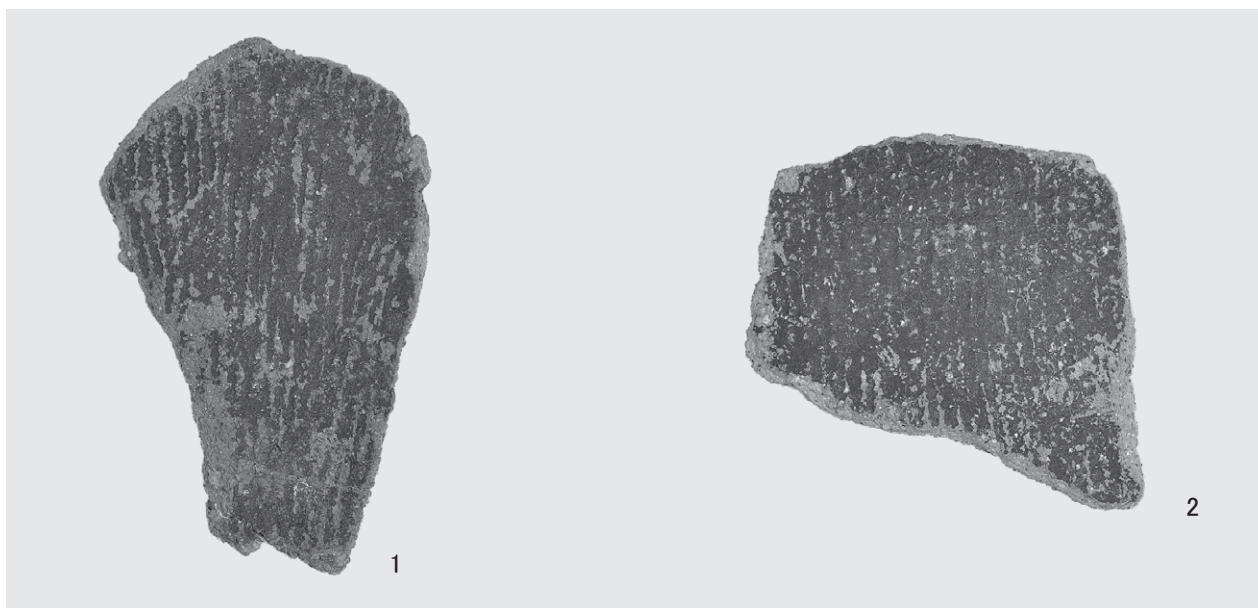


写真1 択捉島ニユモイ1遺跡採集の遺物 (S=1/1)

くりに挑戦するなど埋蔵文化財を活用した学習が実施された。我々が共同で実施してきた学術調査が現地で活用され、地域に根ざした形になったものである。

3 学術交流

この学術交流は、外務省の「ビザなし交流・専門家交流事業」の研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。招聘した専門家は、国後島古釜布郷土博物館のスコヴァティツィーナ、V.M.館長（考古・民俗学）をはじめ、択捉島紗那郷土博物館のカイルスカヤ、E.B.館長（郷土史）、国後島古釜布郷土博物館のヴォロニナ、V.A.研究員

（歴史・文化交流）、国後島高等学校のエレメンコ、I.V.教諭（歴史）である。共同調査は、北海道と四島の専門家の博物館交流として実施しているもので、専門家の要望もあり、共通の課題として北海道北部の歴史・文化と史跡保存、地域の人びととの協働による史跡保存・活用をテーマに現地調査を行うこととした。

学術交流の大きな目的は、第一に北海道の歴史・文化がどのように認識されているか、第二に史跡がどのように保存され、教育資源として地域で活用されているか、第三に北海道内の博物館がどのような方法で持続可能な管理・運営をおこなっているかである。

今回の調査は2017（平成29）年10月5日～10月10日

の6日間であり、第一に北海道北部とサハリンとの歴史・文化をテーマに北海道北部の博物館や史跡、文化施設などの調査を実施した。第二に天塩町の天塩川歴史資料館、天塩川口遺跡を中心に地域の人びとが進めてきた歴史・文化活動と史跡の保存・活用をテーマとして、天塩町の方々と歴史・文化交流を実施した。

(1) 北海道北部とサハリンの歴史・文化

北海道北部とサハリンの歴史・文化を展示する博物館と、その地域の史跡や遺跡の活用について、北海道の現状を把握し、地域に博物館が果たす役割について検討する機会とした。また、調査目的は北海道の歴史認識を共通のものとするものであり、さらに北方四島の専門家より先史文化から近代にいたる北海道とサハリン（樺太）との歴史的な交流に関わる調査が要望され、これを受けることで関連する歴史・文化遺産および考古・歴史の資料調査を加えて本調査を計画したものである。

この調査では、稚内市北方記念館、音威子府村エコミュージアムおさしまセンター、枝幸町オホーツクミュージアムえさし、浜頓別町郷土資料館、天塩町天塩川歴史資料館を中心とする各地域の史跡や遺跡などを調査した。

①稚内市北方記念館と史跡調査

1) 博物館の調査では、稚内市北方記念館で市内の遺跡から出土した鈴谷文化、オホーツク文化の考古資料を調査し、これらの文化集団がサハリン（樺太）から北海道へ移動してきた状況や、考古学的な文化交流の実態についての情報を収集した。さらに、間宮林蔵などの樺太（サハリン）探検に関わる資料を調査し、近世の北海道と樺太の往来や、当時の物流・交易について歴史認識を深めた（写真4-1）。

2) 史跡調査では、北海道指定史跡宗谷護国寺跡、旧会津藩士の墓、間宮林蔵カラフト出港の碑、旧日本海軍望楼跡は、近世から近代の樺太進出や北方警備をめぐる日本とロシアの対外関係性について情報を収集した。さらに、これらの歴史・文化遺産を観光資源として保存、活用している稚内の状況について情報を収集し、国後島や択捉島での歴史・文化遺産の活用や実践について意見を交わした。特に、遺跡から出土した遺物が博物館で見ることができること、歴史的に重要な文化財が現地保存されていることなど、歴史・文化遺産と連動した博物館活動に注目していた（写真4-2）。

特に、遺跡の現地調査では、オンコロマナイ遺跡、増幌チャシ、増幌川口2号チャシの鈴谷文化、アイヌ文化などの調査を実施した（写真4-3）。増幌チャシ、増幌川口2号チャシの調査では、北海道博物館が実施した

チャシ調査の成果をもとに、サハリンとこの地域でアイヌ文化がどのように展開していたか、歴史認識を深めた（右代 2000；右代・鈴木ほか 2004、2005）。北方四島に存在するチャシとの関係について意見を交わした。

②猿払村史跡の調査

猿払村の史跡調査では、猿払電話中継所跡、インディギルガ号遭難者慰霊碑の調査を実施した。

猿払電話中継所跡は、1934（昭和9）年11月1日に北海道側の海底ケーブル陸揚げの重要な中継所として設置された場所である。中継所完成後、東京～札幌～豊原間の電話が通じるようになったのは、同年12月11日に北海道と樺太を結ぶ海底ケーブルの敷設が完成してからである。この北海道と樺太の通信にかかわる近代の文化遺産について、歴史的な情報を収集するとともに、電話中継所をめぐる太平洋戦争下の北海道と樺太の歴史的な認識を深める機会となった（写真4-4）。

インディギルガ号遭難者慰霊碑では、ロシア人700余名の犠牲者の冥福祈るとともに、遭難者救助に全力を尽くした猿払村の方々に感謝の意を込め献花をおこなった。この遭難事故は、1939（昭和14）年12月12日カムチャツカからウラジヴォストクへ向かうソ連船インディギルガ号が浜鬼志別沖の1.5kmのトド岩で座礁転覆した大惨事である。12月の厳冬の中、浜鬼志別の住民が総出で救助を行った海難史にのこる大事故であった。この事故をつうじ、人道的な歴史があったことを再認識することとなった（写真4-5）。

また、これら近代の歴史文化遺産の保護と活用をモデルとした、北方四島での近代歴史文化遺産の保護と活用について意見を交す機会となった。

③エコミュージアムおさしまセンターの調査

音威子府村の博物館の調査では、アイヌ民族の伝統的な芸術を生かした芸術家、砂沢ビッキの資料および施設の管理運営の調査を実施した。博物館では、再現されたアトリエや作品の展示、作品を引き立たせる展示効果など、砂沢ビッキの作品の制作過程や芸術性の高さや人間性を直接、知る好機となった。

特に、北方四島の専門家は、アイヌ民族の工芸品やアイヌ模様、作品の写真の展示などから高度な工芸技術やその手法に関心を持ち調査を行った。さらに、地域に根ざした博物館の管理・運営や展示手法などの情報の収集につとめた（写真4-6）。

④オホーツクミュージアムえさしと史跡調査

1) 博物館調査では、2016年に展示改修と新たに埋蔵文化財センターも設置した状況について実見した。こ

ここでは、展示の設計や施工についての新たな展示手法、同センターの役割として国指定重要文化財である目梨泊遺跡出土遺物の展示あるいは資料保存管理の具体的な事例について調査した。また、目梨泊遺跡で発見された堅穴住居の実大復元や墓の復元などの展示やオホーツク海域の流水と生物、郷土の歴史について充実していることに関心を持ち調査を行った。さらに、収蔵庫の資料登録や保存管理についての状況や博物館としての年間事業、埋蔵文化財センターの活動などについても調査した。北方四島の先史文化と関連するオホーツク文化の生活や埋葬の様相など、具体的な展示資料から歴史的な認識をもつ好機となった（写真4-7・8、写真5-1・2・3）。

2）史跡の調査は、国指定文化財である目梨泊遺跡出土品を実見し、復元された資料などを踏まえ、遺跡の現地を踏査し、サハリンから北海道、千島列島にいたる先史文化の関連性、さらには埋蔵文化財と開発に伴う文化財保護の考えを現地で議論した。

この調査では、地域の歴史、文化、自然の保護と活用、さらに教育に結びつけた運営など、枝幸町教育委員会やオホーツクミュージアムえさしが担う役割の重要性について実感したものと確信した。

⑤浜頓別町郷土資料館の調査

1）郷土資料館の調査では、町内で発見された縄文文化～擦文文化の出土資料を実見し、浜頓別町の先史文化について調査を行った。近年発掘調査を実施したブタウス遺跡の出土品、遺跡の特徴なども担当学芸員から説明を受け、現状と課題について議論し、理解を深めた。また、浜頓別を中心に隆盛を期した近代の砂金関係資料を調査し、砂金の採取道具や砂金関連遺構の歴史文化遺産としての活用と観光資源化などについて興味深く意見を交わした（写真5-4・5・6）。

2）史跡調査では、北海道指定史跡クッチャロ湖畔堅穴群遺跡とラムサール条約登録湿地（1989年7月登録）であるクッチャロ湖周辺などの自然環境についても現地を視察した。このクッチャロ湖周辺の自然環境や鳥獣保護区の管理体制、クッチャロ湖畔堅穴群遺跡との一体的な維持管理や課題などが話題となり、遺跡の立地環境が類似する国後島東沸湖岸遺跡群の史跡整備や自然保護区との関係などと比較しながら貴重な意見を交換した。

(2) 天塩町との歴史・文化交流

これまで進めてきた学術交流は、地域の博物館や教育委員会などの専門家（学芸員）との交流を主体に北海道の歴史・文化の調査を実施してきた。今回の学術交流の試みとして、地域の歴史・文化が活用され、まちづくりに生かすという視点で、天塩町で歴史・文化活動を行っ

ている方々との交流を加えて実施した。さらに、北方四島の専門家からは、北方四島の現状を伝えてもらうことを目的に実施した。

①博物館調査では、天塩川歴史資料館の展示をつうじ、町民で組織する「てしおかわまちづくり協議会」歴史分科会の委員の方々と天塩町観光課、同教育委員会の方々と地域の自然、歴史・文化について意見を交わす機会とした。また、歴史資料館では、天塩川口遺跡の出土資料調査、擦文文化の生活様相や日本海を通じた物流・交易の実態について情報を収集した。さらに、日本海、天塩川を通じた近世から近代の海運・水運の歴史はもとより、木造物資運搬船「長門船」や漁労、生活の道具などについて調査を実施した。また、「てしおかわまちづくり協議会」の委員の方々からは、歴史的な実体験を含めた貴重な解説をいただいた（写真5-7・8、写真6-1・2）。

②史跡の調査は、天塩川歴史資料館に展示していた資料が実際に出土した天塩川口遺跡を視察し、史跡整備の状況や史跡保護について天塩町役場観光課の担当者菅原英人氏から説明を受け、現在進めている擦文文化の堅穴住居の復元について現場で復元の資材などの調査を行った（写真6-3）。今後の課題も多いものの、行政と地域住民が一体となって地域の歴史・文化を保存し、継承する活動が進められていること、課題として天塩川歴史資料館の運営や活動などの充実をはかり、地域の文化遺産を地域観光に生かすことなど、積極的な計画が説明された。北方四島の博物館施設でも同様な課題を抱えており、有意義な議論や意見交換がなされた。

③歴史・文化交流では、北方四島と天塩町の歴史・文化と現在というテーマで歴史・文化交流会「北方四島の歴史文化と天塩町」を開催した（写真6-4・5）。

現在、天塩町では、第一に町民と行政が協働で史跡の保存活動を実践していること、具体的には擦文文化の堅穴住居を復元しており、今年度からこの改修を行い史跡の保存・活用を計画している。第二に町民で組織する「てしおかわまちづくり協議会」は、官民と一体となった街づくりを進めており、多くの可能性を探り実現化を目指している。このことから「てしおかわまちづくり協議会」歴史分科会の委員と北方四島在住ロシア人歴史・文化専門家、天塩町職員、北海道博物館学芸員の参加で歴史・文化交流会を実施した。ここでは、北方四島の専門家から北方四島の現在と歴史・文化、自然などを映像で報告を受けた。つづいて、天塩町の現在と歴史・文化、自然について担当者から報告が行われた。意見交換の場では、地域の歴史・文化資源の活用と史跡の保存活動をつうじた街づくりのあり方など、活発な意見交換や歴史・文化資源の活用について議論を交わした。さらに、両地域の現状を知るうえで、両地域が抱える課題解決に

むすびつけるなど、貴重な交流となった。その後、天塩町立天塩中学校で生徒と北方四島の専門家との文化交流会を開催した。北方四島の専門家がそれぞれの自己紹介を兼ねて職業や仕事などの講話を行い、その後に生徒が企画したレクリエーションや剣道部員による練習稽古の紹介、合唱などが披露された。北方四島の専門家たちへの質問の場では、積極的に質問が交わされ、異文化に触れた驚きや感動など、互いに友好や親睦を深める機会となった。この交流会では、生き生きとした生徒たちの表情や交流を行う真剣な姿勢は評価されるものであり、交流の目的が達成できたものであった(写真6-6・7・8)。

このように、今回の学術専門家交流は、北海道北部とサハリンとの歴史・文化をテーマに北海道北部の博物館や史跡、文化施設などの調査を実施した。さらに、初めての試みとして天塩町の天塩川歴史資料館、天塩川口遺跡を中心に地域の人びとが進めてきた歴史・文化活動と史跡の保存・活用をテーマとして、天塩町の方々や歴史・文化交流を実施した。また、天塩町立中学校生徒との交流会は、学術交流のなかでも意義深いものとなり、今後の学術交流の成果として生かされるものと考えられる。

このように北方四島の専門家との共同調査は、北方領土問題を越えた共通の歴史・文化の発展につながるとともに、今後も両地域の共通の課題を解決するため歴史・文化の学術交流は重要であることを互いに認識したことは大きな成果である。

4 おわりに

これまで、2017(平成29)年に実施した本研究の成果と学術交流の概要について示してきた。今年は、択捉島の考古学的調査、学術交流として専門家を招聘し、北海道北部の博物館や史跡、天塩町の歴史文化の交流を実施した。この研究成果は、択捉島中部オホーツク海側で3カ所の遺跡を新たに確認し、アイヌ文化のチャシ1カ所を推定した。さらに、史跡「戸田亦太夫藤原常保墓」の現地地点の状況を確認した。これは、北方四島のみならず北方域の先史文化を構築する手掛かりとなる基礎データである。しかしながら、限られた時間の中で実施する調査の限界、さらには今回も2007年からの新クリル発展計画の整備で破壊される遺跡もみられた。この対応として、早急に記録だけでものこすことが大切であることを痛感している。

学術交流である専門家招聘では、継続して北方四島との共通の課題である博物館交流、史跡・文化財の保護、両地域の歴史・文化の認識など北海道内で調査を実施し、試みとして専門家間の交流だけではなく広く地域の人び

ととの歴史文化交流を実施した。この調査では、北方領土問題を越えた歴史・文化交流の重要性、文化遺産の大切さなど、これまで以上の成果をあげることができた。

本研究が果たす学術交流の役割と、北方四島の専門家が果たす役割については、解決しなければならない多くの課題が山積しているのが現状である。しかしながら、この学術交流では11年間続く交流のなかで多くの成果をあげ北方四島の専門家も歴史・文化の重要性を理解し受け入れるようになり、課題解決にむけた理解が一層、深まってきているのも事実である。人的な学術交流はもとより、博物館交流の課題としては歴史・文化的な情報の共有化や展示活動、文化財資源の評価、文化財資源の整備・活用、収蔵資料の保存活用など、基礎的な整備が重要になってくることは間違いない。将来的には、遺跡の地形測量、さらに発掘調査など、共同で実施できることを願っている。これは歴史・文化の解明、歴史教育の資源としても計り知れない成果が期待できる。また、発掘調査は、現地での学校教育の教材として、地域の社会教育的な資源とし活用されることは確実であろう。

この研究が果たす学術交流は、このように北方四島の歴史・文化遺産の認識を深め、文化財保護活動や博物館活動を推進することで北方領土問題の解決に大きく貢献できるものとして期待している。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、北地文化研究会北構保男博士にご指導と有意義な助言をいただいた。また、択捉島の貴重な情報をご教示いただいた紗那出身の岩崎忠明氏、留別出身の三上洋一氏、さらに昭和10年代に撮影された写真である祖父高野愛吉氏のアルバムの閲覧、写真使用の承諾をいただいた高野宏康氏(小樽商科大学学術研究員)にご協力をいただいた。

択捉島の現地調査では、クリル地区行政関係者の方々、通訳の木村邦生氏、西田志保氏、外務省欧州局ロシア課課長補佐清水保彦氏、外務事務官森みのり氏、内閣府北方対策室、北方領土問題対策協会にご協力、ご支援をいただいた。

学術交流の専門家招聘では、訪問先の稚内市教育委員会齊藤穰一学芸員、オホーツクミュージアムえさし高島孝宗館長、浜頓別町教育委員会乾茂年学芸員にご指導、ご協力をえた。天塩町の表敬訪問と歴史・文化交流では、浅田弘隆町長、長瀬啓嗣副町長、斎藤啓輔副町長、同教育委員会野崎浩宣教育長をはじめ関係諸氏、「てしおかわまちづくり委員会」歴史分科会委員の方々にこころよくご対応、ご協力を賜った。天塩町立天塩中学校での文化交流会では、藤田智哉校長をはじめ諸先生、生徒の方々にご協力をえた。また、北方領土対策根室地域本部、

北方領土復帰期成同盟などの機関、ならびに関係諸氏には多大なご協力を賜った。ここに記して、感謝とお礼を申し上げるしだいである。

なお、本研究で実施した歴史・文化学術交流の共同調査は、外務省「ビザなし交流・専門家交流事業」研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。

引用・参考文献

- 本城文雄編 1933. 根室千島両国の郷土史. pp. 320.
- 石川貞治 1891. 千島エトロフ島堅穴、古器物発見他. 東京人類学雑誌. 6-59: 173-175.
- 桜田教夫 1981. インディギルガ号海難. 北海道百科事典. 上巻: 167.
- 鹿能辰雄 1976. 択捉島地名探索行. 北方風土記. みやま書房.
- 鈴木琢也 2011. 北日本における古代末期の交易ルート. 古代中世の蝦夷世界. 101-118. 高志書院.
- 鈴木琢也 2016. 平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容. 歴史評論. 795: 16-27.
- 右代啓視 1982. 動物意匠を施した注口・把手付のオホーツク土器. 北海道史研究30: 52-54.
- 右代啓視 1991. オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究年報. 19: 23-52.
- 右代啓視・手塚 薫 1991. ウルップ島アリユートカ湾岸出土の遺物. 北の歴史・文化交流研究事業中間報告. pp. 79-86. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 1996. 千島列島採集の考古資料ー長尾又六コレクションー. 根室市博物館開設準備室紀要10: 71-90.
- 右代啓視 2000. 北東アジアにおけるチャシの起源と位置づけ. 北の文化交流史研究事業研究報告: 35-68. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 2014a. 北方四島の考古学的研究. 中華文明の考古学. pp. 409-424. 同成社.
- 右代啓視 2014b. 新・千島紀行ー発見された千島列島の先史文化ー. 函館市北方民族資料館. 函館市文化・スポーツ振興財団.
- 右代啓視・鈴木琢也・山田悟郎・平川善祥・村上孝一・添田雄二・為岡進 2004. 稚内市増幌チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告 第43号: 67-78.
- 右代啓視・鈴木琢也・山田悟郎・平川善祥・村上孝一・添田雄二・為岡進 2005. 稚内市増幌川口2号チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告 第44号: 85-102.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2008. 国後島の遺跡ー古釜布郷土博物館所蔵資料調査よりー. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史ー2005-07年度調査報告ー. pp. 161-182. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一 2010. 国後島における先史文化の資源利用. 北方の資源をめぐる先住民と移住者の近現代史. 北方文化共同研究報告. pp. 125-140. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2011. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (I). 北海道開拓記念館研究紀要 39: 99-110.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2012. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (II). 北海道開拓記念館研究紀要 40: 143-154.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高島孝宗・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2013. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (III). 北海道開拓記念館研究紀要 41: 59-82.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2014. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (IV). 北海道開拓記念館研究紀要 42: 97-126.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2015. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (V). 北海道開拓記念館研究紀要 43: 37-66.
- 右代啓視・鈴木琢也・竹原弘展・スコヴァティツィーナ, V. M. 2016. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (I)ー特に北方四島の先史文化研究を中心にー. 北海道博物館研究紀要 1: 53-72.
- 右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ, V. M. 2017. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (II)ー特に北方四島の先史文化研究を中心にー. 北海道博物館研究紀要 2: 83-110.



1 ニュモイ1遺跡



2 オーヨ1遺跡

写真2 択捉島調査遺跡



1 有萌1遺跡



2 トコチャチャシ(推定)



3 戸田亦太夫墓址遠景



5 先史文化探検隊の活動(別飛温泉川左岸段丘遺跡)



4 戸田亦太夫墓(昭和10年代撮影;高野愛吉アルバムより)



6 先史文化探検隊の活動(別飛温泉川左岸段丘遺跡)



7 先史文化探検隊の活動(別飛温泉川左岸竪穴群遺跡)

写真3 択捉島調査遺跡、戸田亦太夫墓址、先史文化探検隊の活動



1 稚内市北方記念館



2 稚内市旧会津藩士の墓



3 稚内市オンコロマナイ遺跡



4 猿払村猿払電話中継所跡



5 猿払村インディギルガ号遭難者慰霊碑



6 音威子府村エコミュージアムおさしまセンター



7 枝幸町オホーツクミュージアムえさし



8 枝幸町オホーツクミュージアムえさし



1 枝幸町オホーツクミュージアムえさし



2 枝幸町オホーツクミュージアムえさし



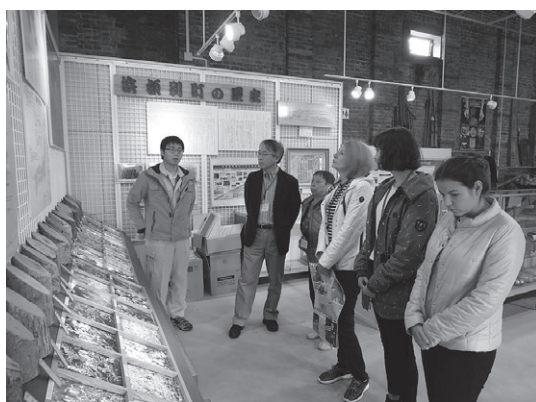
3 枝幸町オホーツクミュージアムえさし



4 浜頓別町郷土資料館



5 浜頓別町郷土資料館



6 浜頓別町郷土資料館



7 天塩町天塩川歴史資料館



8 天塩町天塩川歴史資料館

写真5 学術交流調査



1 天塩町天塩川歴史資料館



2 天塩町天塩川歴史資料館



3 天塩町天塩川口遺跡(復元竪穴住居)



4 天塩町表敬訪問



5 天塩町歴史・文化交流会



6 天塩町立天塩中学校での文化交流会



7 天塩町立天塩中学校での文化交流会(剣道部稽古)



8 天塩町立天塩中学校での文化交流会(合唱)

写真6 学術交流調査

Comprehensive Archeological Research on the History of Human Activity on the Kuril Islands (III):

With Particular Focus on the Research of Prehistoric Culture of the Four Northern Islands

Hiroshi USHIRO, Takuya SUZUKI, and V. M. SUKOVATITSYNA

The Kuril Islands, which stretch between Kamchatka and Hokkaido, is a region that lacks fundamental data – an empty domain regarding the research of the history of human activity from the Paleolithic culture to the Ainu culture. However, as far as the research of Hokkaido's prehistoric and Ainu culture is concerned, an important factor is that it is clear that like the Sakhalin route to the north, the Kuril route to the east also crossed with different cultures.

Therefore, this research – implemented from 2015 as a four-year plan – was established as a comprehensive project to accomplish new archeological research on the Northern Territories, based the results of research carried out from 2005 to 2013. In order to develop the studies carried out to date, the aim of this research was, firstly, to comprehensively clarify the Kuril Islands' history of human activity and; secondly, to build friendly relations and further deepen museum exchanges and awareness of history in both regions by developing academic exchanges.

Achievements in 2017 include the identification of new archeological sites of the earliest stage –

early stage in Jomon culture period, and first half of the Zoku-Jomon culture period in three sites in the coastal area on the Okhotsk Sea side in the middle of Iturup Island, and possibly one site of a Chashi from the Ainu culture. In addition, a survey on the current conditions of "Toda Matadaiyuu's grave" which is related to the "Bunka Roukou" (Russian attack in 1806-1807) was carried out. At the on-site workshop with a partner organization, a prehistoric culture expedition team targeting elementary school students on Iturup Island was formed and a historical study utilizing the achievements of our on-site survey and buried cultural property protection activities was reported. This was a big achievement from academic exchanges up to now.

In the academic exchange, a survey on the theme "History and Culture of Hokkaido and Sakhalin," at museums and historical sites, monuments, and cultural facilities in Wakkanai, Sarufutsu, Teshio, Otoineppu, Esashi, and Hamatonbetsu was carried out. This achievement was the first historical and culture exchange with non-experts who were residents and junior high school students in Teshio town.